

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2012.03) 28号:73～76.

意識の構造(2)

田中 剛

Ann.Rep.

Asahikawa Med. Univ.

Vol.28, 2012

意識の構造 (2)

The Structure of Consciousness (2)

田中 剛

Tsuyoshi Tanaka

Abstract (reprinted)

Our hypothetical schema for the structure of consciousness is based on the synchronistic and diachronistic (transactual) structure of conscious being. This means that the brain is an organism which winds and unwinds its own time.

We know that the phenomenological reduction (epoche) is a conversion of the subject itself, which breaks free from the limitations of the natural attitude by placing them “within brackets” (Einklammerung). It is not a simple purifying process of consciousness, because it suppresses neither the reality of lived experience, nor the reality of things, nor of nature. Consciousness thus does not exclude nature. It goes beyond nature.

In relation to the organization and construction of the self, it is important to note that the self stands at the center of our schema. As concerns the development of the self, it is in a state of constitutional heteronomy, it has no autonomy (S. Freud). The formation of the self, on the other hand, is reduced to its own lack of recognition, that is, a knowledge or a recognition which is refracted through the prism of another's image (J. Lacan). Lacan, as we know, described identification as the joyful assuming of one's own specular image. The self establishes itself in the function of a radical misconception or denial.

R. Magritte illustrated this situation by denying the laws of reflected mirror images. The use of converging lines for painting the Last Supper looks normal in the eyes of the viewer, but it gives us an imaginary viewpoint. Mach lies on his sofa and the body is only partly seen. The cognitive space is illustrated, but his phenomenal space is ignored.

キーワード: 意識の場

2.0 これまで述べてきたことから、「事」も「物」もそこから導き出せるような原・事實的時空間 = 原・現象の時空間とは何か、また、理念的 (ideal) なものと実念的 (ideell) なものとは一体何を意味するのかという問いのヒントが得られてくる。

2.1 現象学、特に Husserl の超越論的現象学をめぐる過去の議論において、「還元」や「志向性」などの概念が独り歩きし、この学問領域全体の眺望が損なわれた印象がある。すなわち、これらの概念がいかに最終的な到達点である「純粹主観」、より正しくは「超越論的主観性」の生成に役立つとしても、Husserl が自ら何度も語っているように、彼の出发点である「心理学主義」に対するラディカルな挑戦の根拠を横に置いてしまっただけで理解が困難になるだけであろう。筆者はかつて、『心身同一性の根拠づけに向けて一からだところの問題についてのある系譜一』(本紀要第23号、2007)において些か荒削りにこの点に触れた。すなわち、「フッサールの現象学的思想、その人間存在についての洞察がある種パターン化されて、具体的身体機能や精神機能の領域から隔絶した超越的な彩りを加えられて流布してきたと言ってもよいであろう」(23頁)と述べた。彼によれば、現象学は実在的な対象世界の「形相」「本質」ではなく、そうした実在世界を志向的に構成する、超越論的主観性という非実在的なものの「本質」「形相」を研究する学問領域である。ここから帰結して、たとえば物理的自然が世界帰属的、つまり世界内的存在(人間)に属する一切の精神性を度外視することによりそれ自体で完結した領域となった如く、超越論的現象学も逆に一切の事物性を排除した「純粹意識」の領域を打ち立てなければならない、ということになる。したがって、いわゆる「精神物理的」領域は最終的には止揚されることとされる。ここに、その成否はのちに問われるが、彼の「ラディカルさ」の根源があることを示唆しておく。

2.2 本論の現段階では、「還元」や「志向性」という概念の有効性と問題点を詳細に云々することはさておき、むしろ前号で掲げた諸例およびシェーマに基づきつつ、また、これらを補強するための新たな諸例や個別シェーマの導入を図る。

2.3 さて、理念的な時空間と実在的 (real) な時空間が無媒介的に結びつかないということ、また同様に、実念的な「時空間」と実的 (reell) な「時空間」も同様であることを発見したのは Husserl である。すなわち、ここでは前提として、無時間的な普遍的本質 vs 時間的な個物、思念作用の有する志向的对象(思念されたものである限り、普遍的对象/個体的対象の別を問わず)にかかわる時空間 vs. 志向作用や与件などの実質的体験成素にかかわる時空間という対立関係の各ペア・グループが拮抗され、これが以後、本論のどのテーマをも支配することになる。ここで、実念的なものは実的なものとは異なり、それ自身が反省的志向の対象として再び内在的に体験されることのできないような超越的な成素であることを示すため、筆者が前号に掲げたシェーマに適用しようとするものである。

2.4 上記のことを手掛かりにして、まず「現象的時空間はどこにあるのか」と問うことが可能になる(「現象学的」ではない)。その際、前号で紹介した Chalmers の著作(1996)において、極めて曖昧に「現象的なもの」という概念が提示され、そこから筆者の考える「実念的かつ実的なもの」—これを筆者は「現象的なもの」全体と捉える立場をとる—との乖離が生じると思われるので、以下にその理由をいかんなく述べておくことにする。

2.5 同書におけるように、「現象的なもの=物理的なもの」と「心理学的なもの」とが

暫定的に区別されるのはよいが、そこでさらに「意識」と「認知」の概念の導入によって、前者二つ（理念的なものと実在的なもの）が後者二つ（実念的なものと実的なもの）とに、それぞれの「特性」として割り振られることは正確ではなく、受け入れ難い。「現象的なもの」は「意識特性」を有し、「心理学的なもの」は「認知特性」を有すると述べられる。これ自体は実に明解に見えるが、截然たる境界が両概念間に存するわけではないことも述べられる。こうなると事態は不明瞭さを増す。「意識」は「物理的なもの」の一特性でもなければ、「物質的なもの」のそれでもない。われわれのシェーマから言うならば、この交合円錐全体が「意識の構造体」である。感覚与件や志向作用そのものは、非本来的な認知的・心理学的時空間に限定されたままでないし、まして実在的・実的な時空間（real-reell な時空間）にまたがる媒介的仮想時空間の成素でもない。しかし、Chalmers は「特性」概念を上記のように使用することによって、必然的に「構造的コヒーレンス」や「構成不変の原理」のような、「意識」を可能にするとされる前提条件を生み出さざるをえなくなるわけである。これらは「現象的なもの」を「実在的なもの」や「実的なもの」に還元したり、逆に「心理学的なもの」を「理念的なもの」や「実念的なもの」へと普遍化しようと意図する場合には有効にも見えようが、本来の「現象的時空間」や「心理学的時空間」を把握するためには機能主義的色彩が強くて役に立たない。換言すれば、それらの前提条件はある種の情報理論に基づく「人工知能」の条件としては貢献するかもしれないが、のちに検討する「意識」の量子論的な場の理論、カオス理論、エントロピー理論には接近すらできない。そのことは、Chalmers 自身が同書において語る通りである。彼の使用する諸概念については、上記諸理論との関連を論じる段になって詳しく解析するつもりである。

2.6 ではもう一度問おう。「現象的時空間はどこにあるのか」と。われわれのシェーマに拠れば、それは「理念的なもの」と「実在的なもの」との間、「実念的なもの」と「実的なもの」との間にある。また、「理念的なもの」と「実念的なもの」はいずれも「思念される超越的な意識の成素」であり、「アプリオリな直接経験」のみがそれらへの通路を見出す。「超越」ということは「言語を超越する」こと、さらには「意識に対立しているもの」を意味し、したがって、また「論理を超越する」ことでもある。しかし、それは「非論理」ではなく「反論理」を意味している。すなわち、「論理的必然性」と「自然的蓋然性」との接合がそこに見出されるような1点が実現する「場」、これがなければわれわれの「意識」が超越論的自我となって脳に宿ることもない「場」、その表裏を捉えたものが「理念的なもの」と「実念的なもの」であると捉えられねばならない。

2.7 あまりにも「古典的」な例であるゆえに本論では図示を略するが、Hering 錯視や Ames の歪んだ部屋のような有名な例は、一般に視知覚の「恒常度」特性によって説明されうるらしい。しかし筆者はこの立場を取らない。これらは「古典的」などでは絶対ない。科学のメスといえども、その説得力ある解明にはほど遠い。これほど自然でかつ合理的な、また透明性を帯びた現象を、われわれは問題視することなく毎日すり抜けているのである。そこで筆者はこの現象をあえて次のように措定する。すなわち、いずれの例も、事物が知覚と交合する「意識主観」に対して、その構造全体の「実的な現象領域」と「実在的な現象領域」とが、どのように関与するのかを示唆している、と。

前者の場合、放射する線の群れは横切る平行線の中央を膨らませる。中央部の交錯する線の占める一定の領域は球面の様相を一気に呈する。だが、両端に近づくにつれ

膨らみは解消してゆく。この視覚現象は「実的」な現象領域がその本来の抑制的な機能を緩められ、それによって「実在的」な現象領域の効力が前面に出たのである。つまり、「主題化」されたのである。また、後者の場合、左奥の女性が右前方へと移動するにつれ、その姿が拡大して迫ってくるように見える。これは逆に、「実在的」な現象領域が「実的」な現象領域に拠って無力化され、即ち抑制され、「非主題化」され、通常のサイズとなってわれわれの眼前に迫るのである。したがって、当初の場所における女性の身体サイズのほうが「実在的」な現象領域の効力による歪みのなかにあったことになる。部屋を意図的に構成していることが果たす機能と、前者の放射線群のそれとは「現象的」には同じものである。また、いわゆる「運動視」においても、われわれの視覚が捉える他者の動きは静止画の単なる連続ではなく、本来「動くもの」に特化し、それが機能するために必要なことは、抑制的に働く「実的」な現象領域の効力が前提になっていなければならない。つまり、「動き」とは、この効力の抑制があって初めて滑らかなものとしてわれわれに知覚されるのである。したがって、ある病態にあるように、もし「実的」な現象領域の効力が損傷によって機能できなくなれば、ものの動きは途切れ途切れの静止画の連続となるのである。

2.8 外界の対象を知覚すると、われわれの眼は遠近感の自然的蓋然性によって、自覚する、しないにかかわらず、「実的」な現象領域へと引き込まれる。自我(= 意識)は前面の「実的」な現象領域とそれとの狭間で迷う。逆に言うと、このとき「実在的」な現象領域から網膜への光の放射が、「実的」な現象領域に重なる新たな次元が存立する。ここから推測されるように、われわれの視覚に備わる遠近感はおそらく解剖学的あるいは神経学的な機能的布置と同義ではない。それはむしろ、「実在的」な現象領域と「実的」な現象領域とが会合する「超越論的自我=意識」の時空間に由来する。この時空間は全体として、知覚される対象によって時々刻々変形するいわば重力レンズの機能を有し、そこにおいては、外界の対象の相対的形態と相対的運動の、変化してやまない推移はもちろんのこと、内的知覚の諸々の対象(覚醒時の思念や夢の中の情景において、それらが不明瞭ではあるが一定の輪郭をもち、遠近の相対的位置をすらもっていることを誰もが知っている)のそれらをも記録される。もし量子論的またカオス理論的意識の「場」が、そのような過程で生ずる多様な形態と運動の重なり合いを、「瞬時に」シミュレーションすることができるとするならば、そこに新たな展望が拓けてくるかもしれない。精神現象領域において、明らかに生物学的現象や、さらには物理的現象が関与する現実を見る限り、それらの領域の新機軸を前者に適用することを躊躇する余地はないと思われる。

2.9 われわれの視覚は多重遠近法システムを駆使する。上述したことから、この機能が「実在的」な現象領域と「実的」な現象領域に起源をもち、主観は結果的にそれらの合成された表象を感受するのだが、これを具現した絵画が身近に存在するので取り上げようと思う。それは Vermeer の Milkmasje である。この作品こそ、視覚の生理学に潜む謎を示唆する適例である。しかし、いわゆる視覚論による「解釈」、「解釈の解釈」は後を絶たず、作品から滲み出る美的振動の波の本体を掴みきれないままである。次節において、これを中世イタリアの画家であり、かつ幾何学者でもあった Piero della Francesca の La Fragellazione di Christo と対比することによって、視覚機能の根底にある2つの現象領域と呼ばれるものが、なぜわれわれの時空間意識の前提とならなければならないかを述べることにする。(以下次号)

(たなかつよし 心身論／医療コミュニケーション論)